

「If you want to go fast, go alone.

If you want to go far, go together. 」

連合大分第35回地方委員会（2018.10.30）が行われ、第15期の2年間のまさに折り返しとなりました。私自身は、この1年、自然災害、政治の有様、働き方改革など様々な意味で、従来の常識では考えられない事態が目立った1年であったと捉えています。



突然ですが、「If you want to go fast, go alone. If you want to go far, go together. 」

アフリカのことわざとされています。意味するところは、「早く行きたいなら一人で行け。遠くへ行きたいならみんなで行け。」ということです。私は最初にこのことわざに出会ったときに「うーん。なるほどね。」と「深みを感じるものがありますねえ。」というのが率直な感想でしたが、自分なりに吟味してみると、自分の考えが少しずつ変わっていくことに気がつきました。

最初に耳に残るのは、「go alone.」（ひとりで行け）と「go together.」（みんなで行け）ですから、どうしてもこの「行き方」を比較してしまい、「みんなでいっしょに行かないといけないだろう」と思いがちになりました。「そうかなあ」という疑問をもってみますと、単純に、「ひとり」か「みんな」か、という行き方の比較をしたものではないと思いはじめました。

いずれも「go」ですから、どこかの目的地に向かうわけですが、「go alone.」（ひとりで行け）の意味するところは、アフリカの大地には、凶暴な動物をはじめ、多くの危険が潜んでいるけれども、「一人でも行かなければならない時」「早い判断が求められる時」「一刻の猶予も許されない時」、そんな時は「一人でも行く勇気を持ちなさい」ということを意味しているのではないかと考えました。

たとえば、「走れ、メロス」を重ねてみれば、「メロスは一人だったので、友人の命のために、3日間走りぬくことができたはず」でありますし、「一人だったので、一度だけ裏切ろうとした気持ちを振り切ることができたのだろう」と考えれば、「一人でも行く勇気を持つこと」は、とても大切なことであると言えます。

他方の「go together.」（みんなで行け）の意味するところは、アフリカの大地には、凶暴な動物をはじめ、多くの危険が潜んでいるけれども、食料や道具、病気・ケガなどの対策を組織的に十分に整えていけば、「目的地に到着するのは遅れるが、ずっと遠くまで行くことができる」ということだろうと思います。

深読みをすれば、組織を構成すれば、「いろいろな個性を持った人たちが集まってくるけれども、組織的になれば、それぞれ個人の多様性の尊重が重要になる」ということだと思えます。

一人ひとりの個人は、「多様性が認められることによって、チームメイトに頼ってもいいと考えや心が育ち、その考えや心が、お互いを助け合い・補い合うことにつながり、引いては個々人の専門性が高まり、イノベーションが生まれ、納得のいく仕事ができ、人として成長する」という組織や個人の成長の好循環が起ることになります。

このことに関して、ある知識人は、多様性に関してこのように言っています。「ある問題に直面した時に、AIが導き出した最適な答えとチームが対話で出した答えの2つがある時、私は迷わず、チームが対話で出した答えを選択します。なぜか、それは、不十分であろうが、みんなが覚悟を込めた答えだからである。」と。

このように考えを進めて見ますと、「If you want to go fast, go alone. If you want to go far, go together.」ということわざは、「個人としての覚悟、組織としての覚悟をいかにして持つか、持たせるか」に行きつくように思います。

第15期後半年度（来年2019年）は、連合結成30周年、中央労福協結成70周年、国際労働機関（ILO）の創設100周年と、労働関係においても重要なイベントの相次ぐ年となります。そして統一地方選・参院選で働く仲間、志を同じくする仲間をなんとしても政治の場に送り出していく闘いの年でもあります。

後半年度も、「新たな発想」をもって運動を構築し、機関会議で決定したことは、「かみ合ったタテとヨコ」を軸に、連合大分組員『総がかり』で存在感を示す運動を進めていきます。

連合大分に結集する一人ひとりの組員の皆さん！ともに団結してがんばろう！

